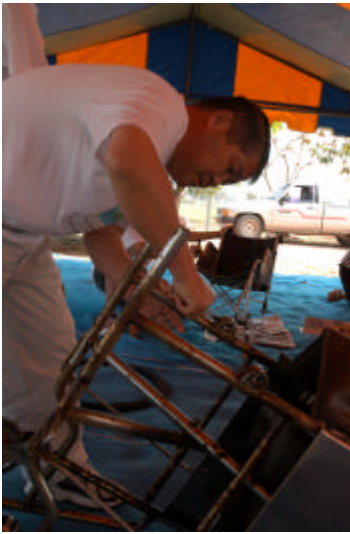


(7) 引率者感想 「栃工高の目指す教育」

学校長 岩出 政雄



今年度は、学校の代表として、16名の生徒と私と引率教諭3名の20名で、タイに行き、国際交流車いす修理ボランティア活動を、12月11日から18日まで実施し、大きな成果を上げて、全員無事帰国しました。その中で得たものは、タイの人達から感謝の心と感動を貰い、生徒達が感動し我々が感動する、感動の共有でした。異国の地に来て、感動し合えることが、何物にも代え難いものでした。そして、毎晩行うミーティングでは、生徒達が1台でも多く直してあげたい為に、作業分担をどうするかなど、真剣な顔と前向きな取り組みを見せてくれました。夜を徹して議論し合い最善策を練り上げ次の日に備えたのです。毎日のスケジュールは、6時半起床、7時朝食、8時に移動をかけた9時に修理を開始し終了は17時頃でした。昼食は作業の合間を見てとったのです。生徒達は、黙々と作業に取り組み頑張ってくれました。汗、埃、汚れ、錆など一切気にすること

なく精一杯取り組んでくれました。ピサノロック県庁のコンベンションホール前の修理会場には地元新聞記者、ケーブルテレビ、タイ3大ネットワークテレビ会社の取材などを受け、新聞やテレビニュースで紹介されました。

日本では到底考えられない、40年も50年も前に作られたものと思われる、錆び付いた手こぎ三輪車の折れた駆動軸を、何時間かけても直してあげようと、最後まで諦めず、悪戦苦闘しながら何度も何度もアーク溶接に取り組む真摯な生徒の姿は、工業人としての技術屋魂と、校訓「和顔愛語」の精神に裏打ちされた真摯な態度だったのです。私は、大変誇りに思いました。身障者の見ている前で直してあげられた喜びは、すぐに大きな感動へと変わったのです。私は、そこに最後まで諦めない技術屋として自信の持てる生徒を見た気がします。

ヌエンクーンにある生徒数176名の国立の小学校ワット・ドン・ミー・スクールでの交流会と、ピサノロック県庁のコンベンションホールで、副県知事さんと握手を交わし、日本から持参した車いすの贈呈式と身障者との交流会も、忘れられない感動の場になりました。小学生達の純真な澄んだ瞳、けなげな姿はなんともかいがいしく可愛くて仕方ありませんでした。生徒達も強く心に受け止めたに違いありません。小学校ワット・ドン・ミー・スクールでの交流会の後ヌエンクーンのヘルスセンターで修理活動は進みました。学校が終了した後、5、6人の小学生が私達が修理活動をしているヘルスセンターに遊びにきました。修理の合間を見て言葉は通じなくとも楽しく遊んでいました。いつの間にか、賑やかさが消え、気が付くと小学生達は、家路に向かっていたのです。時計を見ると17時を指していました。子どもたちは、家に帰って、夕飯の準備をしたり、両親の手助けをします。戦後60年たった今の日本の子どもたちには、想像もつかないことです。その光景から昭和30年代、私が10歳の頃を思い起こしていました。野良仕事から帰ってくる母を、兄妹で待ちわびて風呂を沸かしたり、夕飯を作って待っていたことを思い出しました。その頃の子供たちは、皆それぞれの家で役割を持ち、親の手伝いをしていたのです。

タイを出国する前の晩、最後のミーティングです。タイに来て車いす修理活動を通して得た、ひとり一人の思いを、生徒も我々も一緒になって語り合いました。この時に生徒達の口から出た熱い思いを、私のメモから記録にとどめておきたいと思います。

- ・ 交流会楽しかった。笑顔よかった。
- ・ いい経験になった。また、来年行きたい来年も笑顔見られるように頑張りたい。
- ・ 完成したとき嬉しかった。オーナーに渡して、嬉しそうな顔を見て嬉しかった。
- ・ モチベーション高くてよかった。交流会楽しかった。3年生に引っ張って貰った。来年は、自分が引っ張りたい。

- ・ みんなに、迷惑をかけたこともあるけど、来年バネにして頑張りたい。小学校との交流会楽しかった。はじめていた。よかった。
- ・ 沢山の笑顔を見ることが出来た。人の役に立つことはいいことだとわかったのでよかった。
- ・ かなりの台数を直せたのでよかった。いい笑顔ももらった。今後に役立てていきたい。
- ・ お疲れ様でした。今嬉しいです。不安だったけど、みんなを見ているとすごいなと思いました。N G Oの皆さんと先生方のお陰です。
- ・ 初参加でみんなに迷惑かけたけど、今ここにいて良かった。みんなで活動できて良かった。DVDは良くとれていると思います。N G O、先生方有り難うございました。
- ・ 修理活動ご苦労様、最初で最後だったけど有り難うございました。
- ・ このメンバーで活動できて楽しかった。交流会もうまくできた。最高だった。
- ・ みんな、お疲れ様でした。てこぎ三輪車直ししたくなかったけど、協力し合い直すことが出来たので良かった。タイの歴史については学校で習ってないけどN G Oの方が教えてくれたのでよかった。
- ・ お疲れ様でした。2回目の参加楽しかった。笑顔沢山貰った。おばあさん泣いていた。自分は、最後だけど1・2年生に引き継いで終わりにしたい。
- ・ 自分は、2回目の参加、去年は、3年に頼っていた。今回、自分は3年として大仕事出来たことで自信持てた。これからも栃工の伝統として後輩に受け継いでいって貰いたい。
- ・ みんな笑って、凄くいい活動だった。この活動はみんなが笑えるチャンスのある活動だ。サイワルンさんは、みんな自分の子供のように言ってくれた。寒河江さんが来てくれて、少し堅いのかなと思ったけど、10歳も年が離れているけど楽しかった。3年最後だけど良くできた。笑って、1・2年生にいいところ伝えて、俺の笑顔忘れないで、先生方ありがとうございました。

今回、勇気を持って参加した16名の生徒達は、タイの国に来て、人のためになることがこんなに素晴らしいことなのかと、身もって体験し、良いことが出来たことに満足し大きな自信を得ることが出来ました。これらは、人間が人間として一生追い求めていく、より良く生きていくための術を、心と心のキャッチボールをとおして、笑顔と感動を貰う体験を通して得たのです。学校の授業で培った、ものづくりの技能・技術をフルに生かし、お互いに協力しお会い、助け合い機動力を高めあい修理活動に取り組むことが出来たのです。一所懸命生活していれば、人のためになれるんだということを、国際交流をする中で体得することが出来たのです。人生に於いて、人のためになれることがどれだけ幸せなことなのか、身もって知ることが出来たのです。

3年生は、最後の機会になりましたが、この体験を生かし、これからの自分の生き方を素晴らしいものにして欲しいと考えています。また、この活動は、サイワルンさん、ラッチャイさん、スリヤさん、パニーさん、ソムチャイさんなど多くのタイのN G Oの人達の協力があってできていることに感謝しています。

我々をサポートしてくれたタイのN G Oの方々との、バンコク空港での涙の別れも、生徒達の将来の血となり肉となるものと思っています。何よりもこれらの活動をとおして大きな感動を得たことが、自信となり夢や希望へと膨らみ「国際社会を生きる心豊かな工業人」となり、日本の国を支え、工業立国を目指して活躍できる一員になっていけることを、強く確信するのです。これからも、本校が目指す教育の柱として育み続け、さらに、大きく大きく膨らませていきたいと考えています。

最後に、本校の福祉活動ボランティアネットワークとして支えてくださっている、P T A、同窓会、栃木西ロータリークラブ、国際ソロプチミスト栃木、栃木養護学校の皆様を始め、多くの福祉団体やN G Oの方々に、衷心よりお礼と感謝申し上げます。

幸福の夜明け

機械科 高山 孝司



土ぼこりをあげ、ワゴン車3台は到着した。ここは、タイの首都バンコクから約380km離れたピサヌロークから車で1時間走ったところにある施設である。

その広い庭には大きなテントが用意され、直射日光を遮ることができる。そのテントの下が、修理活動最初の2日間の場所となる。

この地方には、後ろが荷台になったピックアップトラックがたくさん走っている。ほとんどが日本車である。壊れた車いすを荷台に乗せて、事前に活動を知った人たちが集まっていた。

チームは円陣を組み、リーダーのかけ声と共に活動が始まった。車いすの状態はかなりひどい。日本ではスクラップになってしまうかと思われるようなものもある。

さびを落とす。ベアリングをはずしグリースを塗る。タイヤのパンクを修理する。タイヤを交換する。

あたりに響くのは、グラインダーで削る音。溶接の火花が飛ぶ音。

ドリルで穴を開ける音・・・。

自分の車いすが直るのをじっと待っている人がいる。心配そうな眼差し。視線のその先にはメンバーの作業する真剣な姿がある。顔にしたたる汗。いつの間にか日差しが顔に当たっているのも気づかず、無心に修理する。完成した車いすを手渡す互いの笑顔。一つ一つの情景がフレームに納められた写真のスライドショーのようにゆっくりゆっくり時が進む。限られた時間、限られた道具しか与えられてない中で、やらなければならない事は多くある。あきらめるか、続けるか判断も重要な選択肢だ。

医者は病人を治す。どこが悪いのか、原因は何か、どうしたら良くなるか、相手のことを常に思って治療する。工業人はものを作ったり、修理したりする。対象は違っても気持ちは同じである。車いすは話さない。しかし、メンバーは車いすと会話する。少しの傷やさびも見逃さず、少しのゆるみも妥協せず、知恵を出し合い、協力し合い、利用者が使いやすいように修理をする。異国の地で工業人としてのプライドと技を磨く貴重な体験である。この経験は、観光では決して得ることのできないものである。

山と山は出会わないが、人と人は出会えるものだ。

タイのこの地に生きてきた人も、活動メンバーも、これまでそれぞれの地でいろいろな人達との出会いによって様々なことを学び、感じて、生きてきた。そして今もそうして生きている。

この活動で、離れた2つの地の何も接点がないかのように思われる人達との出会いがあった。車いす修理活動を通して互いに影響されながら、土地や環境、文化の違い等、様々なことを感じたことだろう。

今回修理した車いすは、タイ全体の車いすを考えれば、ほんのわずかであったかもしれない。また、タイボランティア活動全体の費用を考えると、新品の車いすを送った方が、修理した台数より遥かに多くの車いすを提供できたであろう。

しかし、この活動は、車いすを送ることではなく、修理活動をしに行くことに意義がある。修理活動をもてもらうことが長期的な支援につながるのだ。タイには、コンビニもあり、目に見える生活は日本と大きな差はないように思われる。しかし、タイではまだ、日本のように困った人に手を差し伸べることまで余裕がないのかもしれない。

人々に捕った魚を与えるのではなく、魚の捕り方を教えるような活動ができれば素晴らしいと思う。今回も、タイの人と一緒に修理活動を行った。タイ国内でも地元の工業高校生達がボランティアとして

車いす修理活動ができるようになることが、これからの栃工のタイボランティアとしての新しい役目であると感じた。

スコータイ(幸福の夜明け)という名の遺跡のある地で、栃工の活動がその名の通り“幸福の夜明け”につながることを願う。

「マイナス2時間の国」

機械科 小倉 幹宏

【出 発】 日本から、-2時間ばかり離れたところに、不思議な国がある。そこはとても熱く、暑く、厚い国だ。一度訪れたものは、12月になると胸の高鳴りを覚え、また、初めて訪れるも者にとっても、ちょっぴりの不安と、大きな希望を抱かせる、そんな国である。その国に入れる資格は、「技術者の魂をもったチャレンジャー」のみ。今年もその国を目指し、「16人の技術者のたまご」が集まった。では、タイムマシーンTG641に乗って、いざ出発。



【2時間の国に到着】 タイムマシンはまずバンコクの大きな飛行場に到着した。日本を10:45分に出発し6時間30分の旅。しかし時計は15時15分。間違いなく-2時間の国に到着だ。夕暮れ時をむかえようとするこの国は、とても暑く、気温は30を超えている。私たちは、たくさんの荷物と宝物をタイムマシーンから降ろし、長い長いタイムトンネルを歩き始めた。

【-2時間の国の家族】 この国には、われわれのもう1つの家族がいる。1年に1度、12月に会うだけだが、お互いの絆は1年中つながっている。長いトンネルの出口で、笑顔で待っている母達の姿を見つけた瞬間、思わず走り出してしまった。そして、今度は飛行機に乗って、家族は「ピサヌローク」という町を目指して旅を進めた。

【スコータイで700年のタイムスリップ】 翌日、われわれが訪れたスコータイは700年前で時間が止まっていた。バンコクなどの大都市と比べ、旅人も少ないこの地では、以前、栄えていたであろう町の遺跡群が、広大な大地に点在している。そこにはひっそりと花が咲き誇り、小鳥が囀っていた。まさに「楽園」だ。当時の都の活気と、人々の熱気が想像できる。この時空間の中にわれわれはゆっくりと体を預け、リラックスするとともに、明日から始まる壮絶なチャレンジに向け、決意を新たにす。

【-2時間の国で出来ること】 この国で、われわれ家族にできることは、この国にある壊れた車椅子を修理し、利用者みなさんに手渡すこと。そのために日本で修理技術を磨いてきた。しかし、受け取った車椅子は、さびがひどく、部品も無く、決して作業が簡単ではないことを感じさせられる。しかし、われわれは「チャレンジャー」だ。そして、この難関を乗り越えるのに必要なものは、家族の「チームワーク」。兄弟同士、2人でペアーを組み、知恵を寄せ合い、連日30を超える気温の中、作業は夕刻まで続いた。充実した時間の中で、最後にいただく利用者からの言葉「コップン・クラブ(ありがとう)」が何よりのご褒美である。

【-2時間の国に学んだこと】 この国で得るものはたくさんある。まず、1つは「やさしさ」だ。人々は、自らの体に多少のハンディキャップを持っていても「サバイ・サバイ(元気!元気!)」だ。そして、まわりの人々へもやさしい気持ちを忘れない。車椅子を修理することにより、逆に、私たちは、多くのやさしさや元気をもらうことができる。そして、「生きる力」。この国の人々は明るく前向きだ。多

少の失敗も「マイ・ペン・ライ(気にしない!)」そして、1日1日を大切に生活している。

最後のミーティングで、若きリーダーの言葉。「この活動は、みんな笑顔になる。明るくなれる。変わるチャンスがある。」そんな - 2 時間の国に、そしてこの活動に、乾杯!

【感謝そして + 2 時間の旅】 今年も、あっという間に別れの時がやってきた。空港に見送りに来てくれた6人の家族との涙の別れ。でも、これは永遠の別れではなく、しばしのお別れ。「また、来年もおいで!」と母、「また、来年も来ます!!」と息子達。偉大な母たちに感謝、毎年変わらぬ風景。これでよいのである。

再びタイムマシーンに乗り + 2 時間、われわれは旅を終える。 - 2 時間の国での出来事は、もう夢の中の出来事。

【最後に】

われわれが、バンコクで飛行機の乗り継ぎを、ゲートで待っていたときのこと。そこでは先発の「プーケット島」行き最終案内が続いていた。多少遅れているようで、「プーケット!」「プーケット!」という案内が何度も何度も繰り返されていた。その声にせかされるように、たくさんの人々が、われわれの目の前を、足早に通り過ぎたのを覚えている。

私たちが帰国した数日後、今回の津波の報道に触れ、とても驚くとともに、あのゲートの風景が思い起こされ、とても悲しい気持ちになった。われわれのタイの家族も睡眠時間を削って働いていると聞いている。

今回の津波災害に遭われた、タイをはじめとするすべての国の人々に、お見舞い申し上げるとともに、現地の1日も早い復興と笑顔が戻るよう、お祈りいたします。

ピサヌロ - クの空の下で タイ・ボランティアに参加

家庭科 関口 朱生子

生徒たちの一生懸命な姿を現地で見たい。この思いがつのり、第15回タイ・ボランティア活動に参加しました。

「ボランティア」に「ボランティア」で応える

わたしたちがタイという異国の地で、言葉も習慣もわからず、土地カンも全くないままに、現地で車椅子の修理活動や交流会を行うことができたのは、タイのNGOの方々のボランティアによるサポートを受けていたからでした。そして、16人の生徒たちは、車椅子を精一杯直すことで、その献身的なボランティアに十分に応えることが出来たと確信しています。それは、NGOのサイワルーンさん、パニーさん、ラッチャイさんが意気揚々と来年の活動の計画を話している姿に表れていたと思います。

「技術者のこだわり」を見た

車椅子の前では、生徒たちはひとりの技術者でした。片道1時間をかけた移動の車中では、おしゃべりと笑いが絶えず、仲間とはしゃぐ高校生でした。しかし、車椅子に向かったとき、あのあどけなさや消えていました。利用者にとって長年愛用している車椅子は自分の足であり、身体の一部です。その車椅子を日本から来た高校生に託し、タイヤをはずし、部品をはずし、ネジの一本一本から丁寧



にサビを落とし、曲がったパイプを直していく様子をどんな思いで見つめていたのでしょうか。そんな視線の重さを感じながらの作業を繰り返し、生徒たちは「技術者のこだわり」を身につけて行ったように思います。

何年も放置され、サビで固まったネジを力いっぱい回せば、ネジ山が潰れてはずれない。持ってきたタイヤのサイズが合わない。もしかしたら、壊れたまま直すことができないかも……。こんな不安と常に戦いながら、少しでもいいものにして渡したい。生徒たちのひとりひとりにこうした強い思いが感じられました。数時間にわたる戦いの後、その戦いを見つめ続けてきた利用者に手渡すその瞬間。「さあ、俺の仕事を見てくれ！」自信に満ちた技術者としての最高の笑顔でした。

ときには、「もう、直らない……」と諦めることを強いられた車椅子もありました。しかし、若い技術者のこだわりと利用者の愛着がひとつになり、見事に完成させたことがありました。生徒たちの注文の部品を調達するために、何度も何度も町中を車で走り回ってくれるタイの NGO の方々の熱い思いもありました。

遠い異国の地で、今もあの車椅子たちは、生まれ変わった姿で利用者の足として活躍していることでしょう。

「布へのこだわり」が生きた

ほころびでも繕えれば、と小さな裁縫箱にテグスを加えて持って行きました。

現地では、想像していたよりもはるかに状態の悪いボロボロのシートがいくつもありました。生徒たちの熱意に駆られながら、わたしの手縫いでシートの補修作業が始まりました。不思議なもので、わたしにも技術者としての意地とプライドが生まれてきたのです。被服を専門とするわたしとしては、恥ずかしくない仕事をしなくてははいけません。できるだけ丈夫にきれいに仕上げたい。

金属には強さと研ぎ澄まされた精細さがあり、またコンマ1ミリのずれも許されないという厳しさもあります。布は金属のような強さはないけれど、経糸（たていと）と緯糸（よこいと）による構造から融通が利き、せん断変形させることで、丸い物は丸く、すべての物を包み込む優しさと温かさがあります。

ピサヌロークの県庁のホールの床に布を広げ、生徒がカットした板に合わせて裁断する。裁断した布でクッションをゆがみや折り目が出ないように包み込み、板に止める。布をこよなく愛するわたし自身が、幸福を感じることができた最高の瞬間でした。

工業高校での家庭科

「家庭科の先生が参加してくれたことで、われわれの車椅子がより温かい物になりました。」

解散式で小倉先生がそう言ってくださいました。この言葉をいつまでも大切に、工業高校での家庭科のあり方を追求し、実践していきたいと心新たに決意しています。

同行取材感想「カメラをブラシに持ちかえて」

共同通信社宇都宮支局 記者 寒河江 裕

何かに惹きつけられるかのように、いつの間にか修理の輪の中にいた。カメラをブラシに、ペンをレンチに持ちかえて車いすを囲んでいた。私は“17人目”の高校生になった気分、さび落としに夢中になった。彼らと共に、手を真っ黒にしながら修理する喜びを感じることができたのは、何よりの収穫だった。車いすの前では、生徒と教師の関係はなく、一人の技術者としての付き合いだけ。日本人とタイ人の間には国境はなく、一人の人間としての付き合いだけ。タイボラは現地の人々との交流のきっかけになっているのは言うまでもないが、校長室、職員室の壁を越え、教師と生徒が同じ目線で同じ体験を共有できる素晴らしさがあると感じた。共に笑い、意見を交わし、技術を競い、時には直接不満をぶつける。本来あるべき教育現場の姿でありながら、現代において次第に失われつつあることではないだろうか。



修理作業に没頭する筆者

今回の同行取材は、「育てる 次世代への贈りもの」と題した連載企画の執筆のため、子ども世代が陥った不登校やすぐキレル危機的状況を踏まえ、懸命に育てる大人と子どもの交流を学校、家庭、地域社会からルポするのが狙いだった。配信した記事は地方紙を中心に多くの新聞に掲載していただいたが、わずか170行の記事とたった1枚の写真で、活動の素晴らしさ、奥深さをどこまで伝えることができただろうか。参加者一人ひとりにそれぞれのドラマがあり、それを伝えきれなかったのが心残りだ。ノートにしまっておくのはもったいない名言・迷言がたくさんあった。

私が参加理由を尋ねると、「内申点アップを狙っていた」「なんとなく外国に行ってみたかった」「最初は行く気は全く無かった」という答えが返ってきたのには驚いたが、「でも参加してみたら違った」「去年やり残したことがあって今年も来た」「あの笑顔がどうしても見たくて」と彼らは語ってくれた。「ありがとうと言って、相手にありがとうと言って初めて修理が完成する」「直すのは台数じゃないって分かったんだ。大切なのは自分が納得できるまで仕事ができるかってこと」「指を挟んでもさ、人のためだと思うから直せるんだよね」「これからつらいことがあっても、あの時頑張ったなって思い出せると思うんだ」「車いすを触るのはこれで最後かもしれない。手の感触を忘れないようにやりたい」…。言葉の節々から彼らの熱い思いが伝わってきた。

私自身、タイボラから、そして生徒から多くのことを気づかせてもらった。10歳以上も年の離れた私を受け入れてくれたこともうれしかった（「アオボン」というニックネームまでつけてもらった）。タイボラを経験した生徒たちがこれからどんな大人に育っていくのか、今から楽しみだ。

最後に、小倉先生を始め取材でお世話になった多くの方々、本当にありがとうございました。これからも20年、30年と活動を続けていってください。

最後に、小倉先生を始め取材でお世話になった多くの方々、本当にありがとうございました。これからも20年、30年と活動を続けていってください。